

如何にして彼はバカの巣窟へ赴くことになったか

mkdn

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バカテスの世界に明久達とはまた違った別ベクトルのバカを入れてみる思考実験（見切り発車）

なおこのバカは無駄にスペックが高いものとする。

目次

(いよいよ春休みももうすぐ終わり……。再来週は振り分け試験かー……。面倒くさいなあ……。)

そんなことを考えながら、「僕」こと「藤村 北兎」はすっかり春休みの間に習慣付いてしまった昼寝をしていた。

どうせ数年後社会人になったら朝から晩まで会社に居るはめになるんだろうし、学生の今ぐらいこうやって昼寝を堪能していてもバチは当たらないだろう。

僕の通う文月学園ではテストの点数によってクラスが決定される。それがさつき出てきた「振り分け試験」と言うやつだ。

優秀な順に「A」から「F」まで6クラスあり、各クラスによって教室の設備などが異なり、格差も付けられている。

例を挙げるならAクラスは冷暖房完備、一人一人にノートPCが支給される上、姿勢に配慮された勉強机と椅子、ドリンクバーや茶菓子まで完備。

逆にFクラスであれば冷暖房どころか隙間風が入ってくる窓に床はポロポロの畳、勉強机は年季の入ったちゃぶ台となっている。もちろんドリンクバーやお菓子なんぞあるはずもない。

なので普通の学生ならば少しでもいい点数を取って上のクラスに行くために勉強するべきなんだろうけど……。生憎と一切気が乗らない。

(あー、ホントに面倒くさい。もうFクラスでもいいかなー、振り分け。けどノートPCにお菓子食べ放題ジュース飲み放題の特典取りに行かないのもなあ……。)

さらに言うなら一切勉強しなくても僕が通う「文月学園」のクラス分けの中で最高ランクのクラスであるAクラスに余裕で入れてしまいう学力を持ってしまっているのも相まって、余計に勉強する気が起きないのだった。

そう、僕はありがたいことに無駄に頭が良かったのである。

いやあ、こればかりは親に感謝だね。

ありがとう、今は遠い空の下にいるお父さんお母さん。(海外へ長期出張中)

あなた達のおかげで僕はこの春休みをひたすらグータラ過ごさせています。

ただ、時間つぶしの為に始めたゲームも春休みの間であらかたやりたい事が終わってしまったのでいまいち気分が乗らない。

「うーん……何しよっかなー……。」

なのでそのままベットでゴロゴロと寝ころんだままスマホをいじっていると――

「…ん？これって……。」

「ふっふっふ……。よしよし、このペースなら今日中にラスボスまで行けるんじゃないか?!」

僕、吉井明久は波に乗っていた。

攻略サイトを見た限り、ここはかなりみんなが手古摺っているステージらしいけど、初見クリア出来そうだぞ…?!

「…えっ?!ちよっつ、そ!こで第二形態は聞いてnああああああああああああああああ!!!」

『GAME OVER!』

「ふざけんなー!!!攻略サイトめ、ゲージ一本で終わるって書いてあったじゃないかあ!!!」

くっそお……っ!所詮僕は、偽情報に踊らされる愉快的道化でしかなかったというのか……!」

攻略サイトを編集した人物をひたすらに呪いつつ、今度はしっかりと情報を探そうとスマホに手を伸ばすと、新着のメッセージが入っていることに気付いた。

どうやら僕の友人である藤村北兔からのようだ。

なんの用だろう。特に今日は通信プレイする予定も遊びに行く予定も無かったはずだけど……。

メッセーリアアプリを立ち上げて内容を確認すると、そこにはこう書いてあった。

『明久、僕振り分け試験の日イベント行くから休むわ』

前々から思ってたんだけど北兔ってひよつとしたら僕よりバカなんじゃないかな？